

## JELS 設立準備の経過報告

三浦 弘 (専修大学)

池田 潤 (筑波大学)

2007 (平成 19) 年の年の瀬も押し詰まった 12 月 26 日 (水) の午後、城生 佰太郎先生にお時間を割いていただき、久しぶりに三浦は音声学研究のご指導を西新宿のレストランで受けていました。1996 (平成 8) 年の初夏から約 1 年半、当時院生だった島田武氏とともに、東京医科歯科大学の難治疾患研究所で、事象関連電位を測定する実験に立ち合わせていただきながら、ご無沙汰しておりましたが、約 2 ヶ月前の専修大学公開講座の講師をお願いして再会を果たし、ご講演の後は落ち着いてお話が出来なかったために、冬休みを待って、ようやくゆっくりとお会いすることが出来ました。

話は尽きることなく、3 時間以上盛り上がりましたが、城生先生が 30 余年にわたって筑波大学で行ってきた研究と教育が、既存の学会の枠組みには当て嵌まらないことが気に掛かりました。後進のためにも、城生先生が筑波大学を定年退官される最終年度 (2008 年度) のうちに、実験音声学のための学会を筑波大学で発会させていただきたいとお願いいたしました。新学会の発足には多大なエネルギーと協力者の労力が必要であるために、その必要性は痛感されながらも、先生はすぐにはご承諾なさいませんでした。筑波大学の一般言語学領域に残る池田への負担を考慮されたものと思います。しかし、池田と三浦とで直接会って、創設の業務や学会運営の方法について話し合う機会を作ってくださいました。それを第 1 回設立準備委員会とみなすことにします。

### 第 1 回設立準備委員会

日時：2008 (平成 20) 年 2 月 2 日 (土) 午後 1 時 30 分～4 時

場所：ヒルトン東京ホテル 2 階 「王朝」 (中華レストラン)

出席者：城生先生、三浦、池田

初めの 2 時間位は食事をしながら、本題には入らず、音声学・言語学の話題に花が咲きましたが、3 人とも新学会の必要性は初めから承知していたため、また、どのような準備をすればよいのかということにも見当がついていたために、終わりの 1 時間足らずで、学会名を決め、福盛貴弘氏に発足後の事務の取りまとめをお願いしようということで散会となりました。学会名は当初の実験音声学会ではなく、池田の提案により実験言語学会とすることに他の 2 人も同意しました。「日本実験言語学会」という名称はここで決まりました。そして、各人が分担した宿題を持ち帰りました。城生先生は発起人をお願いするための「設立趣意書」の原案を作成する、池田は本部を筑波大学に置くための準備 (学会用メールアドレスの取得や会計口座の開設等) をする、三浦は学会名の英語名と略称を考えること、及び、日本学術会議協力学術研究団体の指定を受けるための要件等を調べる、と

いうことにしました。

すぐにメールのやり取りで準備は整い、2月13日（水）から3人が心当たりの方々へ発起人の依頼を開始しました。3月も下旬になると、発起人数は50名に近づいていました。また、その間に城生先生が「定款」の原案を作成してくださり、東京にいる城生先生と三浦とで会って、発起人リストをまとめ、定款を検討しようということになりました。

## 第2回設立準備委員会

日時：2008年4月5日（土） 午後1時～4時30分

場所：ホテルローズガーデン新宿 2階 レストラン「チャオ」

出席者：城生先生、三浦

ゆったりとシャンパンを飲みながら食事をし、夢を語り、JELS発会の打ち合わせをしました。定款案について意見を交わしました。また、次の準備委員会までに三浦が学会の「印章」と住所の入った「ゴム印」を作ることになりました。

## 第3回設立準備委員会

日時：2008年5月22日（木） 午後6時30分～8時30分

場所：専修大学神田キャンパス 7号館 ゼミ772教室

出席者：城生先生、三浦、池田、福盛先生

定款案を詳細に再検討し、会費等の細則についても意見交換しました。発起人についてはほぼ確定し、追加者の目処をつけて、リストの作成を三浦から福盛氏へ引き継ぎました。また、発会式の日取りを8月29日（金）の大安吉日と決め、宣伝方法（ポスターの作成と発送先、雑誌への広告掲載等）について相談しました。

## 第4回設立準備委員会

日時：2008年7月17日（木） 午後6時30分～8時30分

場所：専修大学神田キャンパス 7号館 ゼミ772教室

出席者：城生先生、三浦、池田、福盛先生

発会式に続く総会にかける定款案と細則案について最終修正を行いました。8月29日（金）の発会式、第1回総会・研究大会についての具体的な準備作業の打ち合わせと役員候補者として依頼する方々について調整しました。特に島田武氏には理事として学会誌の編集責任者をお願いするという原案をここで決めました。

その後、発会当日まで、筑波大学の大学院生や大東文化大学福盛ゼミの学生の協力を得て、煩瑣な準備を進めました。さらに発会後も10月2日（木）に第1回理事会を開いて、第1回総会・研究大会の反省、年会費の徴収方法、学会誌、及びニューズレターの作成手順等を話し合いました。軌道に乗るまでの数年間は、

当面する問題に手探りで対処していくことになると思います。小さな学会なので、役員数も少ないのですが、城生会長をはじめとして5名の理事が分担して雑務をこなして参ります。監事の先生方には、会計のみならず、会の運営全体について監査をお願いいたします。本誌の会長挨拶に見られるような学術的意義を認識し、本学会が実験言語学の発展に寄与すべく、会員諸氏の研鑽によって末永く成長し続けることを祈念して止みません。